

2010年11月の研究会は、冒頭に小林事務局長よりツァイス・イコン展が好評裏に11月21日に終了する(詳細は上段の「お知らせ(総括)」参照ください)との報告がありました。

また来年(2011年)1月の研究会は通常と異なり第3土曜日の15日に開催されること、そ

の後研究会に引き続き、同会場で持込み形式の新年会兼AJCC創立30周年記念パーティーを開催するとのお知らせがありました。

研究会報告は高島会長の報告(その1)「ヴェルタのカメラ」、小林(昭)編集委員編の

報告(その2)「持参カメラ紹介」を参照下さい。(編)

研究会報告 (その1) ヴェルタのカメラ 会員番号 0022 高島鎮雄

11月の研究会テーマは「カメラ名またはメーカー名がW、X、Y、Zで始まるもの」と、きわめて広範囲に設定された。ツァイス・イコンを含むからカメラは膨大な数に上り、共通項を探ることが難しいので、私の研究発表のテーマには、Wの初めの方に位置するWeltaのカメラを選んでみた。Weltaはこれまでわが国ではウェルタと英語読みされてきたが、ドイツ語の発音はヴェルタに近い。どちらで読んでいただいても結構である。

ドイツ製のカメラは大衆機から高級機まで広い範囲に亘ってほとんど無段階に分布している。メーカーも上から下まで網羅したツァイス・イコンを例外として、たいていの会社はどこかの価格帯に主力を置いて市場を確保している。そんな中で中級機から大衆機の大手メーカーとして挙げられるのがバルダとツェルト、それにヴェルタであろう。この3社の創立はツェルトが1902年、バルダが1908年、ヴェルタが1914年と6年ずつずれているが、いずれも新しくはないものの、さほど古いわけでもない。ドイツのカメラ産業が確立された後に新規に参入したものである。

創業の地もツェルトとバルダがドレスデン、ヴェルタがドレスデン近郊とドイツ東部ザクセン州の州都に集中している。ドレスデンはビュンシェヤヒュティッヒ(後イカ)、エルネマン(以上後ツァイス・イコン)、クルト・ベンツィオン、ゴルツ・ウント・プロイトマン(メントール)、KW(グーテ・ウント・トルシェ)、バイヤー、ツェー、アルティッサ、シュミッツ・ウント・ティーネマンなど新旧、大小さまざまなメーカーが集まったドイツのカメラ産業の中心地で、部品メーカーが集中していた。またカール・ツァイスのあるイェナから直線150km、フーゴー・マイアのゲルリッツから20kmで、カメラメーカーの立地条件が揃っていた。

バルダもツェルトもヴェルタも製品系列も価格帯もほぼ同一で、したがって互いにライバル同士の関係にあった。このトリオのなかでツェルトは一つの目的に対して独自の解決策を見出すことがあったが、バルダとヴェルタは比較的オーソドックスで(バルダのピエレッタとヴェルタのペルフェクタとゾーパーフェクタを例外として)、大きな冒険は見られない。バルダは二眼レフを作らなかったのに対し、ヴェルタはほとんどボックスカメラを作っていない。私の経験から言えば3社の製品の中で最も品質が高いのはヴェルタのカメラで、70年余を経てもゾーパーフェクタのように複雑な折りたたみ機構をもつものでもガタが

なく確りしており、見た目の衰えも少ない。最も草臥れ易いのはバルダのカメラで、ツェルトはその中間か(ただしこれは飽くまで私見である)。

■ヴェルタ概史

ヴェルタは1914年、WaurichとWeberによりドレスデンに設立され、当初はWeeka Kamera-Werkeと称していた。製品の大半はアマチュア用として当時一般的だった乾板用のハンドカメラで、その多くは“Welta”と名付けられていた。1920年頃には近郊のフライタルに移転、社名もWelta Kamera G.m.b.H.と改める。1923年にはハンドカメラを120ロールフィルム用に改造した6×9cm判のベースボード型カメラを発売、後6.5×11cm判(119)も出す。

1929年にはツァイス・イコンのイコンタを追って前玉回転のスプリングカメラ“ペルレ”(Perle=真珠)を発表、4.5×6cm(120)、5×8cm(129)、6×9cm、6.5×11cmの各サイズを生産する。また1931年には“グッキー”の名で3×4cm、4×6.5cmの一連の127カメラを発売する。さらに1933年にはツァイス・イコンのゾーパーイコンタに1年先駆けて距離計連動の6×9cm判の高級スプリングカメラ“ゾリダ”を出す。ゾリダはラック・ピニオンのレンズ繰り出しを距離計に連動させているが、距離計とビューファインダーは別体の二眼式であった。

それを一眼式に改良発展させたのが“ヴェルトゥール”で、4.5×6cm判(1935年発売)、同ボディで6×6cm判と4.5×6cm判の兼用(1938年)、6×9cm判と4.5×6cm判の兼用(1938年)などがあった。さらに6×6cm判と4.5×6cm判兼用のヴェルトゥールから連動距離計を取り除いた普及型のヴェルタクスも1938年に発売した。

前後するが、1929年に登場したローライフレックスは大きな成功を収め、フォクトレンダーやツァイス・イコンさえ近代的な金属製の6×6cm判二眼レフに追従した。しかしローライフレックスは特許に護られていたので、各社ともそれから逃れるのに苦心していた。ヴェルタも1934年に“ペルフェクタ”で6×6cm判二眼レフに参入するが、それは携帯時に薄くたためるようにした特異なものであった。さらに翌1935年には6×9cm判のレボルピングバックをもつ“ゾーパーフェクタ”に発展させる。いずれも携行時にゴロツと大きい二眼



レフの不便さを回避しようとした意表を衝いたものだが、構造が複雑になっただけで現実にはあまり小さくはならなかった。

1935年には、その前年にデビューしてライカの普及版として成功したレチナを追って35mm判スプリングカメラの“ヴェルティ”を発売、さらに1937年にはそれを距離計連動に発展させた“ヴェルティニ”を登場させる。バルダやツェルトもレチナに追従するが、一連のヴェルタの35mm機が堅実だが最も品質が高いように思える。

第二次大戦によりドイツは二分割され、フライタルの属するザクセン州はソ連の支配下に編入され、ヴェルタはVEB Welta Kamera Werkeとなる。1950年はカメラヴェルケ・タラント(リヒター)を、1951年にはWEFOを併合するが、1959年にはVEB Kamera und Kino Werke Dresden(後のPentacon)に吸収されてヴェルタの名は消えていった。

以下私の所有するヴェルタ・カメラを紹介する。



1924年 ワトソン 6.5×9cm
初期のハンドカメラの1例。木製ボディ、ラック
&ピニオンの二段伸ばし。上下・左右のシフト。
レンズ:クセナー 105mm F4.5
シャッター:旧コンパー T、B、1-250



1933年 ゾリダ
6×9cm/4.5×6cm判兼用スプリングカメラに連
動距離計を加えたもの。焦点調節はラック&ピ
ニオン。ローデンシュトゥック・クラロヴィットはこの
ボディに同社のレンズを装着したもの。
レンズ:クセナー 105mm F3.8
シャッター:新コンパー T、B、1-250



1938年 ヴェルトウール 6×9cm/4.5×6cm兼用
ゾリダの発展型で、ファインダーが一
眼式になり、仕上げがニッケルからクロームになった。
レンズ:クセナー 105mm F3.8
シャッター:コンパー・ラビッド T、B、1-400



1935年 ヴェルトウール 4.5×6cm
距離計連動のセミ判スプリングカメラ。まだ黒ペ
イントとニッケルメッキ。焦点調節はラック&ピ
ニオンの繰り出し。
レンズ:クセナー 75mm F2.8
シャッター:新コンパー T、B、1-250



1935年のヴェルトウール 4.5×6cm(右)と1937年のオートセミノルタ(左)
1937年のオートセミノルタはヴェルトウール4.5×6cmにブラウベル・ロール
オーバーの自動巻き止めを組み合わせたものであった。ただしトップカバーは
ヴェルトウール6×6cm/4.5×6cmのクロームのデザイン。



1937年 ヴェルトウール →
6×6cm/4.5×6cm兼用
4.5×6cmと共通のボディで6×6cm
判との兼用としたもの。ボディレ
リーズになった。
レンズ:クセナー 75mm F2.8
シャッター:新コンパー T、B、
1-250



オートセミノルタ(左)とヴェルトウール6×6cm/4.5×6cm(右)。
ベースボード先端の距離スケールも同じ。



←ヴェルタックス
 ヴェルトウール4.5×6cmから連動距離計を取り除いたモデル。これは戦後東ドイツ製で、実際の生産はVEBラインメタルで行われた。
 レンズ:テッサー 75mm F3.5
 シャッター:テンポール B、1-250



戦前型ではWeltaと入っていたところにRheinmetallの文字とロゴが刻まれている。ラインメタルは大手鉄鋼、重工業工場であった。



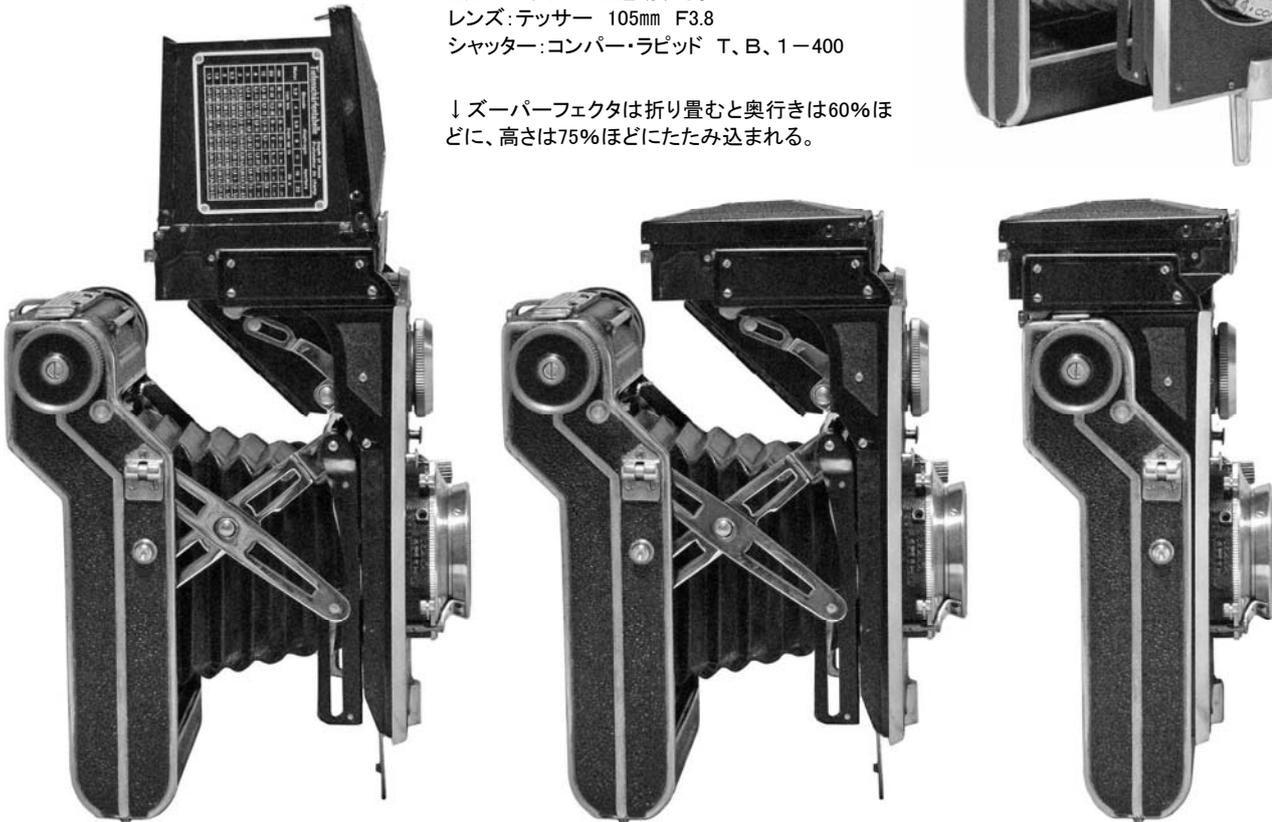
1931年 グッキ 3×4cm
 4×6.5cm判を含めて127フィルム用はグッキと呼ばれた。これは3×4cm判で珍しいライツのエルマーレンズ付きである。
 レンズ:エルマー 50mm F3.5 シャッター:新コンパー T、B、1-300

同じグッキでも4×6.5cm判は普通のスプリングカメラだが、3×4cm判は4本のアームによるストラット型だ。



1935年 ズーパーフェクタ →
 6×9cm判の大型二眼レフで、スプリングカメラでもある。ビューレンズはヴェルタスコープ75mm、F3.8と短い、ちゃんと連動する。
 レンズ:テッサー 105mm F3.8
 シャッター:コンパー・ラピッド T、B、1-400

↓ズーパーフェクタは折り畳むと奥行きは60%ほどに、高さは75%ほどにたたみ込まれる。





スーパーフェクタ
 撮影レンズの後ろにターンテーブルがあり、蛇腹以後が左へ90度
 回るレボルビングバック。同時にファインダー内ではマスクが自動
 的に切り替わる。



スーパーフェクタ

ボディ左側面には折りたためるフレームファ
 インダーがある。赤窓には1を出したあと
 は、カウンターの窓に出る数字を見て巻き
 止める。



1937年 ヴェルティ

1935年の最初のヴェルティは前玉回転で
 あったが、1936年からはヘリコイドになり、
 1937年にはクローム仕上げになった。
 レンズ:テッサー 50mm F2.8
 シャッター:コンパー・ラピッド T、B、1-500



1952年 ヴェルティ I

ヴェルティは戦後も東ドイツで作られ
 た。ヴェルティニ II から連動距離計を
 外したものになったので、前蓋がひ
 どく厚くなった。
 レンズ:トリオプラン 50mm F2.9
 シャッター:フェブーア B、1-250



1938年 ヴェルティックス

ヴェルティがヘリコイド繰り出し、ク
 ローム仕上げの高級機になったの
 で、初期の前玉回転とブラック仕上
 げの廉価版に回帰したモデル。
 レンズ:カッサー 50mm F2.9
 シャッター:コンパー B、1-300



ヴェルティ、ヴェルティックスに
 共通のパララックス修正ファ
 インダー。ただしN(近景)と∞の切
 り換えのみ。ボディレリーズで
 二重撮影は防止されている
 が、巻き止めの解除ボタンは最
 後のヴェルティニ II まで独立し
 ていた。



1937年 ヴェルティニ

レチナ II に1年遅れて出たヴェルティの
 距離計連動版。一眼式ファインダーはレ
 チナ II より優れる。タスキはヴェルティよ
 り簡略化され、二重露出防止もない。
 レンズ:クセノン 50mm F2
 シャッター:コンパー・ラピッド T、B、
 1-500



1938年 ヴェルティニ II

流線型時代を反映してトップカバー
 のデザインを改めた新型で、クロ
 ムメッキの仕上げも変わった。二重
 露出防止になった。
 レンズ:クセノン 50mm F2
 シャッター:コンパー・ラピッド T、B、
 1-500



1938年 ヴェルティニ II

ヴェルティニに標準的なレンズはクセ
 ノンF2だが、カッサーF2.9やテッサ
 ーF2.8付きもあった。本機は珍しいライ
 ツ・エルマー付きだ。
 レンズ:エルマー 50mm F3.5
 シャッター:コンパー・ラピッド T、B、
 1-500



ヴェルティニ II

ヴェルティやヴェルティニではヘリコイドでレンズを
 繰り出してあっても、前蓋を閉じると自動的に∞へ
 戻るようになっている。